

平成 26 年 6 月 30 日現在

機関番号：36101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720336

研究課題名(和文) 19 - 20世紀転換期における日本のアカデミズムと被差別部落認識

研究課題名(英文) Studies on the Buraku People in Japan at the turn of the 20th century

研究代表者

関口 寛 (SEKIGUCHI, Hiroshi)

四国大学・経営情報学部・准教授

研究者番号：20323909

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：黎明期の日本のアカデミズムにおいて、被差別部落民はどのような存在として理解されたのか。本研究では、人類学者の鳥居龍蔵、民俗学者の柳田国男、歴史学者の喜田貞吉らの被差別部落研究を取り上げ、彼らがどのような関心から被差別部落研究を行ったのか、また彼らの研究が当時の日本人論とどのようなかわりを含んでいたのかについて考察した。研究の結果、被差別部落民については日本人を構成する周縁的エスニック・グループの末裔という認識が強かったこと、そして、こうした認識は日本社会全体に広く受け入れられていたことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：As what kind of existence were the Buraku People understood in the academicism of Japan of the dawn? In this study, the author took up studies on the Buraku People of Ryuzo Torii, an anthropologist, Kunio Yanagida, a folklorist, Sadakichi Kida, a historian, and others. Moreover, what kind of relation were there between their studies and the theory of Japanese People? As a result of the research, it became clear that they understood the Buraku People the descendant of the peripheral ethnic group which constitutes Japanese People. And such recognition was widely accepted in the Japanese society as a whole.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：部落問題 鳥居龍蔵 柳田国男 喜田貞吉

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 20世紀初頭、日本政府は初めて被差別部落に対する政策を開始する。この出来事は、従来、近代における部落問題成立のメルクマールとされてきた。しかし、当該期における被差別部落(民)に対する認識は、ただ無理解や偏見に満ちた差別的なものとして扱われることが多く、これについて正面から取り組んだ研究は少数であった。

その背景として、これまで近代の部落問題については「封建遺制」として捉える強固な認識枠組が存在したことを指摘できよう。また明治政府がいち早く「身分解放令」を出したように、近代社会は封建的身分制を否定するなど、平等化原理を統治の根幹に据えている。こうした歴史観のもと、被差別部落(民)に対する差別的な認識や理解はいずれも前近代的、封建的な社会制度の残滓と位置づけられてきたのである。

(2) しかし1990年代以後、近代社会もまた「文明/野蛮」「勤勉/怠惰」「清潔/不潔」といった二項対立的価値規範によって階梯的な支配秩序が形成され、支配者層と民衆の間に分割線が引かれたことが指摘されてきた。言い換えれば、近世の身分制度とは異なる原理の下に、近代社会もまた差別的に社会を編成するのである。

被差別部落(民)についても文明化や公衆衛生などの近代化の緒政策をつうじて、こうした社会規範のもとに否定的価値を付与され、差別的な支配原理のもとへと再編成されたとする研究が現れてきた。

また、当該期に西洋から移入された優生思想や人種主義にもとづく世界観と部落差別の相関を指摘する研究も登場してきていた。

## 2. 研究の目的

本研究では、上記の動向を踏まえつつ、当該期に特徴的な部落問題認識を明らかにしようとした。この時代に遂行された部落問題政策に強い影響を及ぼしたと考えられる歴史学、人類学、民俗学などの学知において、被差別部落民とはいかなる存在と認識されたのか。またそれが当時の日本社会や学問状況とどのような関わりをもっていたのかを明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

19世紀末から20世紀初頭にかけて被差別部落(民)研究に取り組んだ人類学者・鳥居龍蔵、民俗学者・柳田国男、歴史学者・喜田貞吉らを中心に、黎明期の日本のアカデミズムにおける被差別部落(民)論を取り上げた。彼らの研究がいかなる学問的背景から生

まれたのか、また学際的観点からみたとときアカデミズム全体において被差別部落(民)とはどのような存在と位置づけられたのか。さらには、そうした理解が当該期の部落問題政策にどのような影響を及ぼしたのかについて考察した。

## 4. 研究成果

研究の結果、以下の諸点を明らかにしえた。

(1) 日本のアカデミズムにおいて、被差別部落民について初めて本格的研究を行ったのは、人類学者・鳥居龍蔵である。彼は、1890年代以後、当時西洋の人類学界で隆盛していた身体計測調査による人種分類法を用いて、国内の被差別部落民の研究を実施した。

鳥居は身体計測調査をつうじて、被差別部落民を「マレー系人種」と推定した。同時期に鳥居は、日清戦争によって日本が植民地として獲得した台湾の先住民調査に従事していた。彼の感心は同じく「マレー系人種」とした台湾先住民と被差別部落民が同系統の「人種」であることを証明することに置かれていたと考えられる。当時、日本人は蒙古系とマレー系の二系統の混血によって形成されたとするドイツ人医師・ベルツ(Erwin von Bälz)の説が有力視されていた。こうしたなか、鳥居は被差別部落民を南方系人種に求めたわけである。

その後、鳥居は日本各地で身体計測調査を実施し、日本人の主要な構成員が大陸北方の「蒙古人種」であるとの認識を打ち出して行く。1910年に日本が韓国を併合すると、鳥居は朝鮮半島でも住民に対する身体計測調査を実施する。そしてこれらにもとづき、鳥居は主要な日本人を「蒙古人種」に求める「固有日本人論」へと発展させ、『有史以前の日本』(1918年)を発表する。

同書において鳥居は、日本人種が縄文式土器を使用したアイヌ、台湾を経由して北上したマレー系人種、大陸北方から渡来し弥生式土器を使用した蒙古人種(固有日本人)、中国南部から移住し銅鐸をもたらした苗族(ミャオ族)などから構成されたことを主張した。同書は大正期のベストセラーとなり、当時の日本人種論の最も有力な学説となる。

同書で明文化されたわけではないが、こうした理解にもとづけば、被差別部落民は日本人の主要な構成員とは別系統の、周縁的エスニック・グループということになる。また鳥居が実施した被差別部落民の身体計測調査においては、当該期の世界中の人類学者らが共有していた人種間の優劣や進化の程度の差異を前提とされていたことが窺われる。

その後、鳥居は被差別部落民研究から離れていくものの、彼の被差別部落民研究は新聞記事などをつうじて社会に流布したこと、当該期の日本社会の被差別部落民理解に大き

な影響を与えたことを指摘しうる。

(2) 柳田国男は農政の官僚としての道を歩み、法制局参事官に転じた後、歴史や習俗の研究に取り組み、さらにこの研究活動を押し進めて日本民俗学の創始者となったことで知られる。

彼が初期に取り組んだテーマとして、山人および漂泊民に関する研究がある。このうち前者は日本の先住民であるアイヌの祖先が、渡来した日本人によって北に追われる一方で、長らく内地の山間にも棲息し、日本人の山神や天狗、鬼にまつわる信仰が発達する土台となったとする一連の論考として発表された。

一方柳田は、この信仰には大陸から渡来してきた芸能や宗教者の強い影響が窺われるとした。そして中世や近世の被差別民の起源が、これら漂泊民に求められることを精力的に訴えた。

彼が1910~20年代初頭にかけて発表した山人および漂泊民にかんする研究は、当時、知識人界で大きな関心と呼んでいた日本人種論に触発されたものといえる。柳田は山神や鬼、天狗信仰などに代表される日本文化が、日本人種の形成とともに発達したことを明らかにしようとしたのである。

しかし当時の柳田は『遠野物語』(1909年)のように多くの読者を獲得しえた著作もあったものの、彼の研究のモチーフは十分に理解されたとはいいがたかった。特に漂泊民に関する研究は戦後になるまで、忘却された状態に置かれることとなる。だが、同時代の研究者である喜田貞吉は、柳田から強い影響を受けて部落史研究を標榜するようになる。

(3) 喜田貞吉は文部省の教科書の検定や執筆に関わった後、京都大学の教授となり、同大や東北大学で古代史の教鞭をとった。喜田は、「複合民族論」で知られる日本人種論を展開したことで知られる。

喜田は複合民族論のなかで、どのような人種が日本列島に到来したかについて、その大枠については鳥居龍蔵の学説を踏襲している。ただし被差別部落民については、古代史研究の立場から独自説を提示した。喜田は、被差別部落民の起源を、天孫族(蒙古人種)よりも前に朝鮮半島から渡来し、弥生式土器を使用した国神人種で、天孫族に征服され、隷属状況に置かれた人びとに求めている。さらには、柳田国男の山人論の枠組をも流用し、蒙古人種によって征服された異民族が被差別部落民に編入されたとする論を展開している。

また部落史研究を初めて標榜したとされる『歴史と民族』の「特殊部落研究号」(1919年)において、喜田は必ずしも異民族起源説を否定してはいない。後の1922(大正11)年に全国水平社が創立された後、喜田はかつての自身の説でもあった被差別民を異民族、異

人種ととらえる立場を強く否定するようになる。「異民族起源説を否定した」という喜田像は、これ以後に出来上がったものといえる。

(4) 以上の人類学、民俗学、歴史学のいずれの分野における研究者も、当初、被差別部落民を日本社会の周縁に位置するエスニック・グループとして理解していたことが分かる。彼らの説は各専門分野のいとは一定の支持を得ていたこと、また、新聞メディア等をつうじて広く社会に普及していたことも指摘しうる。

さらに当該研究をつうじて明らかとなったこととして、同時期の日本社会の被差別部落理解が、西洋から移入された遺伝や人種にかんする生物学や医学など様々な西洋科学の影響を強く受けていることが判明した。今後はこうした方面における学知と部落問題認識との関わりについて究明が待たれるといえよう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

関口寛、20世紀初頭におけるアカデミズムと部落問題認識、社会科学、91、2011、pp.125-147、査読有

関口寛、大正期の部落問題と解放運動、歴史評論、766、2014、pp.61-74、査読有

関口寛、留岡幸助と部落改善論、部落史連続講座講演録 2013年度、2014、pp.97-116、査読無

[学会発表](計 1件)

関口寛、20世紀初頭の社会福祉における人種主義と部落問題、「人種表象の日本型グローバル研究」研究例会、京大大学人文科学研究所、2011

[図書](計 1件)

関口寛 他、差別とアイデンティティ、阿吽社、2013、pp.185-205

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

## 6．研究組織

### (1)研究代表者

関口 寛 (SEKIGUCHI, Hiroshi)  
四国大学・経営情報学部・准教授  
研究者番号：20323909

### (2)研究分担者

( )

研究者番号：

### (3)連携研究者

( )

研究者番号：